



コーちゃん・オーちゃんの 「見つけた！豊岡元気人」



校正の入った原稿

文化祭のイラストでも活躍！

『弁当と傘』第1号・第2号を手にする山根さん

コーヒー専門店店長が紹介する 豊岡・但馬のいいところ

「但馬でのなんでもない日々が一段と愛おしく、豊かになりますように」と願い、小冊子出版に挑戦した4人の30代女性たち。その1人を紹介します。

山根和恵さん(33歳)戸牧

本職はコーヒー専門店店長。そこから、まちのイラストレーター、小冊子出版と活躍の場を広げる元気な女性が、山根和恵さんです。

絵描きがつないだ縁

物心が付く前から絵を描き続けている山根さん。理由を「本来の自分に戻れます。勝手に脳が楽しんでいる感じ」と、率直に表現します。

大開通り周辺には、山根さんの絵があちこちにあります。約10年前、大学卒業後に、家業のコーヒー店が所属する地元商店街の販売促進委員に就任したことがきっかけでした。その会議で、子どもの時にお世話になった「近所のおじさん」と再会。山根さんが「絵描き」だと知っていたおじさんは、店舗のシャッターへ絵を描いてほしいと依頼しました。その後、宵田商店街の「かばんストリート」にも山根さんの絵が並ぶようになりました。

「この時期、さまざまな業種の方とつながりができ、この人脈が小冊子出版の助けになりました」と出会いの大切さを語ります。

形あるものに

大学生として大阪で4年間を過ごした山根さん。「豊岡に帰ってきて、ふるさとの古いものが大好きになり、良いなと思うようになりました。豊岡にずっといたら、この面白さに気付けなかったかも」と振り返ります。

2年前、但馬地域に根ざした小冊子出版を考えていた女性と出会いました。「豊岡の良さを何か形あるものにした」と考えていた山根さんは、その計画に参加しました。

弁当と傘

小冊子出版に向けて集まったメンバーは、4人の30代女性。全員フルタイムの仕事を持ち、限られた時間内での編集作業でした。

題名は『弁当と傘』。この地域に伝わる「弁当忘れても傘忘れるな」が由来です。「私たちには当たり前という言葉でも、外から見ると面白い言葉」が採用理由とのこと。

出版は素人と言いながら、「外からの目線、女性の目線記事の切り口などを大切に編集」とビジョンは明確でした。それを実現するために、広告を

掲載せず、経費を自己資金と賛同者の協力で賄いました。編集室は山根さんのコーヒー店。女子会さながら、おしゃべり感覚で、メンバーが記事の案を出し合うことから始まりました。その後、担当とな

った記事の取材・撮影・原稿の作成をし、みんなで検討を繰り返しました。「会議では遠慮なしに、厳しい指摘も飛び交います。でも、いい本を作るためには必要なので、頑張りました」と笑います。こうして、昨年10月に第1号、今年6月に第2号を出版しました。第3号は、来年の春までの出版を目指しているということです。

伝えたい思い

「豊岡の街中を自転車ですべていけると、街並みや風景が良いなと思います。大開通りのレトロな建物は落ち着きまじ、生田通りのネオンや、昭和の変な建物を建てちゃったな、みたいなのも好きです。他の地域にはない景色が、生活の中にあるのが楽しいです。弁当と傘を通して、日常を楽しむ目線に気付いてもらえれば」と目を輝かせます。

9月25日号、24ページの「見つけた！豊岡元気人」の中で「JFAエントリープログラム」とあるのは「JFAエリートプログラム」の誤りでした。お詫びと訂正します。

学校探検

中学校編 6

森本中学校(竹野)

案内者 飯田 榎也くん(後列左)・岡本 萌さん(前列右)・山根千佳さん(前列左)・田中三基くん(後列右)(3年1組)



森本中学校の在校生は36人で、学校教育目標に「自ら学び、仲間とともにたくましく生き抜く生徒の育成」を掲げています。

同校生徒会長の飯田榎也くんは男子バレーボール部、副会長の岡本 萌さんと書記の山根千佳さんは女子バレーボール部、田中三基くんは卓球部に所属しています。

「部活動の楽しいところ」を聞くと、飯田くんは「みんなでボールをつなぎ、点が取れたとき」、岡本さんは「試合で点差が大きく離れて勝っているときや点が入ったとき」、山根さんは「試合で勝つ



たとき」、田中くんは「練習でも試合でもラリーが続いているとき」と答えます。

今回は、飯田くん、岡本さん、山根さん、田中くんの4人に森本中学校を紹介してもらいました。

特徴ある取組みとして、年に1回実施する「お年寄り訪問」があります。生徒が3、4人のグループに分かれて地域のお年寄り宅を手紙とお菓子を持って訪問します。

最初はコミュニケーションをとることが難しいですが、打ち解けてくる楽しいです。これから生徒



▲お年寄り訪問

数が減っていきませんが、継続していききたいと思っています。

「ボランティア清掃」では、月に1回、地域のごみ拾いをします。

夏は暑くて大変ですが、ま



▲ボランティア清掃

ちがきれいになっ

ていくのでうれし

いです。

「ノーチャイム」(授業と授業の間のチャイムを鳴らさない)は、1年生にとつては慣れるまで大変ですが、自分たちで時計を見て行動することはとても良いことです。

また、「ペットボトルキャップ・ベルマーク集め」は、伝統的に行っているもので、回収箱を設置して、常時回収しています。毎年6月には多く集めたグループ(1、3年生混合)を上位3位まで表彰しています。

森本中学校は1年生から3年生まで仲が良いです。これから

顔の笑

地域の誇り、伝統を後世に伝える

赤野太刀振保存会(但東)

赤野太刀振保存会は、昭和7年に発足し、今年80周年を迎えました。

太刀振りは、伝承によると「江戸時代後期、この地域に疫病がはやり、人々が苦しんだが、村人の作平が天秤棒の先に刀のようなものを付け、『悪魔退散、病氣平癒』

と言いながら振り回し、皆が同調すると次第に疫病が収まった」という話に由来します。



▲太刀振り本番の勇姿

現在の赤野太刀振りは、明治に丹後地方から奥藤を経

由して伝わったもので、楽(太鼓・笛)に合わせて太刀を振り優雅に舞います。道で振る「道振り」、神社の参道での「大門」、境内で振る「宮振」の3種類があります。小学4年生から大人まで参加し、宮振では中学生以上が2、3人に分

かれて5種類の舞を奉納します。

保存会会長の渡辺和志さんは「都会にいても帰ってきて、太刀振りに参加する人もあります。百年先もこの伝統を伝えたいです」と力強く語りました。

本番の10月6、7日に向けて、9月は月・水・金、10月になると毎日練習。10月1日夜も、赤野神社の境内では、時折雨が混じる中、かがり火がたかれ、熱心な稽古が続

ていました。保存会青年会会長の宮垣喜人さんは「この時期に神社に来るのは恒例のこと。絶やさないよう、楽しんでやっていきたいと思っています」と元気に話していました。

太刀振りは、住民の絆を強め、地域を元気にしています。